

原爆文学研究会報

第七〇号

原爆文学研究会 二〇二四年三月

子どものための誰も死なない物語

畑中 佳恵

愛娘の進学が決まりました。高校の目と鼻の先に転居するため、地下鉄の駅三つ分移動します。大わらわです。親バカです。

小ネタを突っ込んだ紙ファイルは、段ボールの中。何か書くにはパソコンの古いファイルを漁るしかありません。発足当時の原文研で発表した資料をうっかり開けてしまい、そつと封印します。その下には「クロがいた夏」というファイル。アニメ映画のタイトルですが、原作・脚本は中沢啓治さんです。私さぼっている間に研究会で話題になった可能性大です。が、その懸念も封印します。何か書くには図太くないかね。

娘が小学四年生だった二〇一八年の夏、「福岡市母と女性職員の会」主催の「クロがいた夏」上映会に参加しました。小学校から案内を受けて母子で一四〇〇円支払い、西市民センターにて鑑賞。北九州市出身の私にとって、福岡市の平和教育が「広島原爆」を教材とすることには興味がありました。地元の戸畑も小倉も徹頭徹尾、「長崎原爆」だったからです。そのアニメ映画版「クロがいた夏」ですが、中沢さん自身がモデルだという坊主頭の少年・誠は、おさげ髪の元気な少女・伸子に改変されていました。また、誠の命を原爆から救う元・野良猫のクロは、立派な鯛を取（盗？）って帰還する

たくましい黒猫でなく、カラスに襲われる瞳の大きな子猫として登場しました。一九九〇年代の少女漫画の風味が感じられる作画。幼気で愛らしい動物と少女のカップリングが好まれるのは、この世の理なのでしょう。

さて、子ども向け原爆映画として、被ばくした身体をどのように表象しているかは気になるポイントです。漫画絵本にカラーで描かれた痛ましい身体表象は、淡泊なタッチで挿絵風にデフォルメされ、原作ラストのコマでサバイバーの手に配されていた黒焦げの人体も見当たりません。映画を観る児童への配慮は、伸子の家族全員をほぼ無傷で生き残らせた点に顕著でしょう。伸子を助けたクロは天に召され、それを見送る伸子の「クロは星になって生きています」というモノローグで物語は閉じられます。子どもたちのために整えられた、誰も死なない物語。お婆さんとタヌキが仲直りして終わる「かちかち山」と同様、八〇年代以降のありふれた光景の一つと言えればそれまででしょうか。

受験を終えてコタツでのんびりしている娘に、「あの映画、覚えてる？」と尋ねてみました。「主人公の弟とクロが屋根の上で昼寝してたのが衝撃だった」そうです。

たしかに。あの日、観客席でも小さな悲鳴があがっていました。そうだね。落ちたら死んでしまうものね。

第七〇回 原爆文学研究会報告

二〇二三年十二月九日・十日に第七〇回原爆文学研究会を開催しました。一日目午後は中尾麻伊香さんの司会で、小林エリカさん、福田恵さんをお招きし、芸術やアートを切り口とした原爆記憶の表現と継承について考えるワークショップ。二日目午前には、川口隆行さんの司会で原爆文学の翻訳について考えるワークショップが開催されました。二日目午後には会場を移動して、映画『寡婦たちの村』の上映会を行いました。上映後、松永京子さんの司会で、ピーター・ブロウ監督によるトークと質疑応答も行われました。

二日間の様子について、鳥羽耕史さん、望月遊馬さん、東村岳史さんの三人から印象記を寄稿いただきました。参加できなかった会員の皆様にも当日の様子を感じ取っていただければと思います。

◇ワークショップ①

「記憶から開く表現」印象記

鳥羽 耕史

この研究会の初日のセッションは、中尾麻伊香氏の司会で、小林エリカ氏と福田恵氏が報告し、柿木伸之氏と山本昭宏氏がコメントした。

小林エリカ氏の「死んでからもなお生きつづけること」は、過去二〇年ほど、原子力という目に見えないものを追ってきた軌跡を紹介するものだ。一〇歳で『アンネの日記』を読んだ感銘を受けた小林氏は、父の八〇歳の誕生日の時、一九四五年から一九四六年、父が一六歳から一七歳だった時の日記

を見つけた。戦争や空襲に続く日常のディテールを見て、今生きている日常と地続きなを感じた。父がアンネ・フランクと同年の一九二九年生まれで、生きていたらアンネも八〇歳ということに初めて思い至った。父とアンネの二冊の日記を持ち、アンネの死んだところから生まれたところへ旅をして、その間の日記をつけるのが最初のプロジェクトになった。父は一七歳の誕生日に『キュリー夫人伝』を読了。科学を愛する崇高なる精神に打たる」と書いている。戦後の日本で初めて公開されたアメリカ映画はマーヴィン・ルロイ『キュリー夫人』（一九四三年）だった。小林氏は二〇〇七年にニューヨークに滞在した際、キュリー夫人の娘のエーヴ・キュリーが一〇二歳で死んだという報道に接し、そこから『マダム・キュリーと朝食』という小説を書くことになる。

小林氏はキュリー夫人が石を取り寄せたヨアヒムスタールという小さな町にも行った。ピッチブレンドという黒い不幸の石にウランやラジウムがあることがわかり、放射線治療のはしりとしてホテルが栄えた。ここには一九三六年のベルリン・オリンピックの聖火リレーを待ち望むエンブレムが残っていたが、代わりに二年後、ナチスドイツの軍隊がやってきた。

納得いくまで資料を集めて腑に落ちないと作品にならない現場を見てみたいと行くが、放射能はそもそも見えず、見えないことを実感して帰ると小林氏は言う。風船爆弾を作った東京の女学校の資料は散逸しているが、「風船爆弾座談会」を書き残してくれた誰かがいて、その奇跡に出会った重みがあり、自分も次に渡したいという気持ちがあるという。

福田恵氏の「記録からひらく表現 How to Keep it in the Body 広島のアーカイブについて考える」も、まず自身の体

験から語った。ハノーバーの交換留学で発表した「無題（記憶）」、「無題（記録）」という作品が原爆を想起させると新聞に書かれて抗議した。福田氏はシチュエーションを作った場を作り、記録することに関心がある。広島から逃げたかったが、活動をしていくうちに、ベルリンと広島の共通性に気づいたという。そして『劫火の跡 子孫におくる』（甲田町被爆者の会、一九八五年）に祖父が書いた、福田節「原爆の恐ろしさを語り継ごう」という手記をもとにした映像作品を上映した。

柿木氏、山本氏のコメントの後、五名からの質疑と応答、柿木氏の追加コメントもあり、刺激的で活発なセッションとなった。血縁者の日記、手記からの表現の広がり大きさに、芸術家の創造力を実感させられた。

◇ワークショップ②

「翻訳がつなく経験

——マーシャル、セミパラチンスク、広島」印象記

望月 遊馬

第七〇回原爆文学研究会の二日目のワークショップ「翻訳がつなく経験——マーシャル、セミパラチンスク、広島」に参加した。タイトルにあるように、まさに「経験」という点と点をつないで線をつくるようにして、作品の全貌を描きあらわしていくような大きな営為があった。ここではその営為を、その軌道の痕跡を、ひとつひとつ大切にたどっていきたい。一谷さん、溝渕さん、李さんがそれぞれの小説、詩歌という近隣のジャンルのなかで、いくつかの翻訳の可能性を提示された。それは本当に熱のこもったワークショップだった。

一谷さんはマーシャル文化への理解をうながすために手法的な問題に切り込んでいき、韻律や形象詩の再現についてわかりやすく説明された。溝渕さんは、小説のなかに隠された装置や基盤をひもといてゆく医師のような仕方ですこに底流する「隠れた対象」を炙りだした。李さんは、詩の問題を、表記の問題、改行の問題へとひもづけていく——はたして詩の「立ち姿」「佇まい」とは何か——翻訳のなかに隠された、人びとが気づかずに通る過ぎてしまう細やかな配慮にも、この場に居合わせた人たちは、立ち止まって考えてみたくなつたのではないか。三人の発表はそれぞれに異なる問題を孕んでいながらも、同時に関連しあっていた。さまざまに反射するこの問題をひとつにとりまとめる技術を、わたしはまだ持っていない。しかし、ここを拠点に思考する必要性も同時に強く感じた。

そのようなことを考えながら「美は細部に宿る」という言葉を思う。この言葉は「美」が持つ因果関係への信頼を踏まえたものである、という解釈で本当に良いのだろうか。たとえば舞踏家の美しい振り付けを、静止面の連続だと解釈したら、その静止面のどの部分を切り取っても前後の静止面との因果関係のうちに捉えることが出来るのではないか。しかしこれを因果関係のある連続体として楽しむことも、静止画一枚を単独で楽しむのも、鑑賞者の自由である。この選択の民主主義こそが表現としての摩擦であり葛藤なのかもしれないけれども、いかなる場合も、読者が受けとる文学というものは、多面的になるかもしれない。今回の発表は翻訳という細部への配慮、発表者の現在における葛藤が、文学の持つ概念の固定化から逃走を図るべく果敢にも道すじを分け入っていた視力の現場そのものだった。この発表に私は大きな感銘

を受ける他なかった。それは観客の反応にもあらわれていて、発表の最中においても客席からは類のない集中力が発散されていた。私は今回はじめて原爆文学研究会のイベントに参加したのだが、多くの意見、表現を目の当りにした。このような会が七〇回も続けられてきたこと、そして、これからも続くことは、さまざまな問題に向き合う真摯な問いが現在進行形で発し続けられることなのだと思う。私もその問いに向き合い、考え抜くこと——そこにある空気を染め抜くような言葉信頼したい。

◇ワークシヨップ③

『寡婦たちの村』上映会&トーク印象記

東村 岳史

まずは企画してくださった松永さんたち関係者にお礼を申し上げたい。このような企画がなければ、カナダでも上映の機会に恵まれなかったという作品を日本で私が見ることはなかったであろう。

この映画の中で、ポート・ラジウムで採掘されたウランが広島原爆に使われたことを知ったデネの女性が「申し訳ないと思う」と語った言葉から、先住民族と核開発に関するもう一つの事例を私は思い起こした。オーストラリアの北部準州ミラルの土地から採掘されたウランがおそらく福島第一原発でも使われていたことを知ったあるリーダーは、原発事故後”*“This makes us feel very sad”*と語ったという。カナダとオーストラリアの先住民族が日本の核被害者に対してこのような感情を抱いていること自体、日本ではほとんど知られていないだろう。ただ、話を戻すと、当日の質疑応答でもふれ

られた点だが、映画を一度見ただけでは、デネの人々がいう「償い」(make amends)という言葉の意味を私は充分には咀嚼できていない。他の資料を参照する機会があれば、掘り下げて考えてみたい点である。

他にも掘り下げる価値があると思われる点がある。一つは、広島側の受け入れ態勢と反応である。ブロウ監督の話では、デネの一行が河村病院を訪問し朝鮮人被爆者たちと対面したのはコーディネーターの采配によるものだったらしい。質疑応答では、岡本三夫(平和学)が代表を務めていた「第九条の会」が仲立ちしたと補足説明があったが、広島ではこの邂逅はどのように受け止められたのか。当日会場から質問されていた豊永恵三郎氏ら関係者からお話をうかがえる時間があればよりよかったと思う。もう一つは、被曝により多くの伝承者が世を去り文化の継承が困難になっていたのではないかと思われる村(デリネ)で、なぜ伝統的価値観が「復活」(という言葉が適切かどうかかわからないが)してきたのか。そして映画で描かれた状況はその後どうなったのか。

また、監督のトークには、映画では描かれていないが、当時や現在の背景を理解するために重要な情報が含まれていたとも思う。たとえば、デリネの村人たちと同じ飛行機に乗っていた宣教師たちの傲慢な言動、近年も大きな問題となった先住民族の寄宿学校における性暴力など。質疑応答の時間が限られていたのがやや残念ではあったが、核とコロナリズム、レイシズムの結び付き、そしてその解きほぐしを考える上で、多くの示唆を与えてくれる企画であった。

彙報

第七〇回 原爆文学研究会

〇日時 二〇二三年十二月九日(土)十日(日)

〇会場 広島大学東千田未来創生センターM303講義室

合人社ウエンディひと・まちプラザマルチメディア
スタジオ北

〇ワークショップ①

「記録からひらく表現」

司会者…中尾麻伊香

小林 エリカ「死んでからもなお生きつづけること」

福田 恵「How to Keep it in the Body―ヒロシマのアーカ

イブについて考える―」

コメント…柿木伸之・山本昭宏

〇ワークショップ②

「翻訳がつなぐ経験―マーシャル、セミパラチンスク、広島

―」
司会者…川口隆行

報告 …一谷智子・溝淵園子・李文茹

〇映画上映会

『寡婦たちの村』上映会&ピーター・ブロー監督トーク

司会者…松永京子

映画『寡婦たちの村』上映後、ピーター・ブロー監督による
トークと質疑応答

〇共催

広島大学総合科学推進プロジェクト「核・原爆にまつわる表現の探究」

広島大学人間社会科学研究所ひろしま「平和研究」イニシア

ティブJSPS科研費基盤研究 (B) 「環太平洋圏における

核と原爆をめぐる想像力と植民地主義の研究」

JSPS科研費基盤研究 (C) 「殖民暴力とデイクロナイゼ

ーションから考える平和学」

編集後記

二日目午前のワークショップ印象記は詩人の望月遊馬さん
にお願いをしました。望月さんには、この第七〇回研究会に
初めてご参加いただきました。他、印象記をお願いした鳥羽
耕史さん、東村岳史さん、巻頭エッセイをお願いした畑中佳
恵さんには年末年始、新年度の準備で多忙を極めるなか、
快く執筆依頼に応じていただきました。この場を借りて、厚
く御礼申し上げます。

第七〇回研究会は対面のみ開催ということもあり、多く
の方にご参加いただきました。懇親会も多くの方が参加して、
盛況だったようです。私自身、新型コロナウイルス感染症拡
大と出産育児が重なって以降、研究会はオンライン参加にな
ることが多くなっていました。ご無沙汰していた対面での研
究会参加は、休憩時間中の雑談も含め、大きな刺激となりま
した。司会者や登壇者だけでなく、会場に集まる参加者の息
遣いや体温を感じられる対面開催ならではの「繋がり」を感
じる回となりました。

最後になりましたが、大変な幕開けだった二〇二四年。能登半島地震で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。私の職場でも能登を故郷とする方が、今も東京と能登を行き来しながら働いています。穏やかな日常が一日も早く戻ってくることをお祈りしています。

(堀本 嘉子)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八・一九・一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 URL <http://www.genbunken.net>